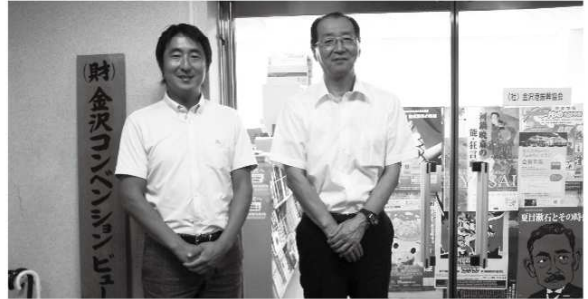


1面からの続き

「ハコ」が無くても十分誘致はできる

後藤は、9月に金沢市を視察。既存の公共ホールや民間のホテルの会議室を活用し、新たな「ハコもの」を作らない方針で成功している事例です。「コンベンション誘致の目的は、あくまで県外・海外から、人を呼び込む」ことが目的であって「ハコもの」を作ると逆にそれがボヤけてしまう」と大変示唆に富んだ指摘をいただきました。また、ハードに金をかけない代わりに、誘致補助金制度やおもてなし体制などソフト対策を充実させることに力を入れることができます。

さらに、国際会議統計の実績を見ても、金沢市は104件。「大宮ソニックスティイ(国際会議場)」を持つさいたま市が18件ではないことから考えると、「ハコ」を作れば国際会議が誘致できるといふ発想は間違いだといふことを証明しています。



ハコものに頼らずにコンベンション誘致に成功している金沢市を視察

「金沢モデルを高崎で」対案を提示

後藤は、対案として、金沢方式を参考にしたコンベンション誘致を行うべきと提言しました。高崎市の駅周辺の公共ホールやホテルを組み合わせれば、本計画の会議施設と同レベルの機能を確保できます。県は「移動が大変」と反論しますが、後藤は、同じ建設物の中を移動するだけよりも、高崎の「街なか」を「高チャリ」や「高力フエ」などを楽しみながら移動する仕掛けを作った方が来県者も「高崎」を味わえるし、何よりも中心街が活性化するのではないかと提言しました。

過疎山村地域振興策に対する「本気度」を問う

「過疎を逆手に取る」新たな経済の可能性

高崎の旧倉洲地域など、群馬県の半分以上は過疎地域が占めています。有効な対策が打たれることなく事態は深刻さを増しています。後藤も、榛名や倉洲地域で地域づくり活動を続けながら、過疎地域に道路整備をして企業誘致するなどといった「昭和型」の振興策は通用しないことを痛感しています。



広島県の先進的な過疎山村振興策を調査

一方で、関東よりはるかに過疎問題が深刻であった中国・四国地方などでは、これまでお荷物とされてきた山林資源をエネルギー活用したり、地元の農産品を福祉施設等で利用するなど、あらゆる分野で地産地消を進め、地域内でお金が回る仕組みを作る「里山資本主義」と呼ばれる取り組みが活発に進められています。過疎を逆手に取り、大儲けできなくても人間らしい暮らしができる新しい経済の可能性は、過疎山村地域にこそあると後藤は考えます。



剣崎町交差点において榛名方面からの右折車両が混雑するとの声を受け、地域・県警・県の3者による立会調査を実施。右折矢印信号を設置するべく要望しています。

「過疎先進地」中国地方に学べ

後藤は、先進的な取り組みを進める広島県を視察。群馬と比べ、人員(広島13名、群馬4名)予算規模(広島2億、群馬1千万)ともに過疎対策への「本気度」の差を痛感しました。後藤は、広島県の「過疎地域の未来創造支援事業」を紹介。県と市町村が話し合っ、観光誘客数や農業出荷額など「雇用」を生み出すための具体的な目標を定め、それに向けた事業のために県が全面的に支援する思い切った事業であり、トップ(知事)の強い意志が取り組みの差として表れていることを厳しく指摘しました。

地域活動三報告 (八幡・豊岡地区)



地元・柴田和正市議と協力し、八幡小学校前の歩道に安全柵を設置。



地元・柴田和正市議と協力し、八幡1区・4区公民館から道を挟んだ西向かい側の市道を拡幅。出入りが容易に。



豊岡自動車教習所跡地にスーパー大手のベルクが進出を決定。後藤も行政・地元との繋ぎ役の立場で協力。地元代表者に集っていただき説明会を開催。